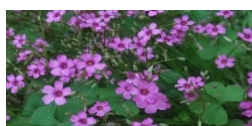


## 残暑 お見舞い申し上げます！

暦の上では、大暑を過ぎ立秋を迎えました。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ驚かれぬる」と歌にはありますが、秋は遠い・・・まだまだ暑い今日この頃です。さて、浜松文芸館の夏の講座を幾つか紹介しましょう。



7月29日(土)、「夏休み絵本づくり講座」が開催されました。小学3年生から6年生までの児童30人が、自分で作ったお話を基に、飛び出す絵本づくりに挑戦。ユニークで楽しい絵本が完成しました。世界でたった一冊の絵本です。夏休みの思い出づくりの一つになりました。8月6日(日)、浜松文芸館講演会『井上靖と浜松』を50人余りの方が聴講しました。井上靖は、小学6年に湯ヶ島から元城小(現・中部学園)に転校、その後、浜松中学(現・浜松北高)に入学。13歳から14歳までの2年間という短い期間ですが、大変密度の濃い思春期の時をこの浜松で過ごしました。中学受験に失敗し、必死に勉強してみごと一番で浜松中学に入学した井上靖の浜松での生活は、小説「帽子」に語られています。制服のこと浜名湖での水泳練習のこと体操の先生のこと・・・興味深いエピソードが満載。井上靖の作家としての一面を知る手がかりになった講演でした。



### 館長のひとり言・・・「雑」にエールを送る

見渡せば、家の庭には、雨後の竹の子ならぬ雑草が元気いっぱい伸びています。いやいや「雑草」だなんて、雑草に失礼ですね。皆、名前のある草花です。この「雑」という字を使ったものには「雑用・雑音・粗雑・雑貨」など日常生活の中でたくさんみかけます。意味は、「いろいろなものが入りまじっていること」「どの分野にも入らないもの」「大まかでいい加減なさま」など、少々軽んじられた意味合いで使われている語が多いかもしれません。しかし、「雑」を侮ることなかれ。確かに「雑」は、主役に対する脇役、立派なものに対するそれほどでもないものを表しますが、雑多なものの総称だけに、その中には、きらりと光る種や芽が含まれているとある雑誌に書いてありました。なるほど、この「雑誌」こそ、「硬軟取り混ぜた様々な話題や知識が盛り込まれた情報の宝庫。「雑談」も、無駄なようで実は役立つことがたくさんあります。何しろ雑談ですから、肩の力を抜いてそれぞれがワイワイがやがやおしゃべりします。そこから「ふむふむ。なるほど。こうしましょうか。」と深まったり新発見があったりと、実は、へたな会議よりずっと意味深いのが雑談なのです。浜松文芸館でも、お客様方と交わす雑談から、教えていただくこと感動することがたくさんあります。何より楽しい！浜松文芸館をより知っていただく意味でも雑談を大切にしていきたい館員一同です。

大正8年(1919)浜松中学校3年の時、みのるは五社神社の下にあった映画館に、学校から厳しく禁じられていた映画「生ける屍」をこっそり見に行った。その中で歌われた「漂泊の唄」に彼は「すっかりしばれてしまった」という。

曠漠たるたるシベリヤの台地をさまよい行く、悲恋に泣く女性の唄うシーンがどれほど私の胸に焼きついた事か。当時私達が唄い、かつ、耳にした歌はわれわれの校歌か先輩達の学ぶ高等学校の寮歌位のもので、多感な私達にそういった逍遙歌だけで満足できる筈がなかった。そこへ、「西は夕焼け東は夜明け、鐘が鳴ります中空に……」ときたのだからたまらない。私はノートの隅に北原白秋作るところのこの詩をメモして、幾つかの替え歌を作って、一人悦に入っていた。

歌の文句は、次の通りである。

行こか戻るか <sup>オーロラ</sup>北極光の下を      ロシヤは北国 果て知らず      西は夕焼け 東は夜明け  
鐘が鳴ります <sup>なかぞら</sup>中空に      泣くにや明るし 急げば暗し      遠い<sup>とうかい</sup>燈火も ちらちらと  
止まれ幌馬車 休めよ<sup>あお</sup>黒馬よ      明日の旅路がないじゃなし

(「浜松百撰」昭和41年1月号)

当時はどんな時代だったかという、5年前の大正3年8月に第一次世界大戦が勃発、わが国も日英同盟の誼によりドイツとの国交を断絶、青島攻略に参戦した。大正7年11月に終戦、国中が戦勝と戦争景気に湧いた。そんな世相を反映して活動写真も歌謡曲も消費享楽傾向を示していた。しかし戦勝景気も東の間で、全国的に労働争議が続発、ベルサイユ条約では冷遇され、大正9年3月から世界的に株価の暴落が続き、わが国は空前の不況にさらされたのである。

みのるは、「みじめな時代だった。〈漂泊の唄〉にシビれていた頃から、わずか一年もたたないうちに、時代は急旋回したのである。その頃であった。流行歌もそれを反映して、「枯すすき」や「籠の鳥」などの退廃的な歌が流行って、われわれも、ただ、口ずさんでいたのだ」と書いている。

中学時代から、こんな下地があったところへ、立教大学へ入って先輩のサトウハチローや作詞家佐藤惣之助らとの出会いがあって、詩人で作詞家の清水みのるが誕生したのであろう。自身も「笑い話になるような、このうろ覚えの唄に刺激され、この道一筋を歩き続けたのだらう」と言っている。

エッセイ「唄え！浜松」は、この後のことを次のようにつづけている。

そのせいであつたらうか、僕ははやり唄というものにすごく魅せられて、それからというもの歯の浮くようなおセンチな文字をノートに書き記すようになった。

類は類を呼んだのであろう。浜中(今の北高)の前に神社があるが、すぐその前に亀屋という菓子屋があって、そこが僕たち若き文学少年のたまり場所となつたのである。